

---

# 絵の馬

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

絵の馬

### 【Nコード】

N1581D

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

ペルシアでのお話。貧しい騎士クシャルーンは家の側にいつもいる見事な馬を乗ってみる。それが全てのはじまりであった。聊斎志異のお話をペルシアにアレンジしました。

## 第一章

### 絵の馬

ペルシアの話だ。ここにクシャルーンという貧しい騎士がいた。家が没落して壁をなおすこともできないでいた。

若くして家族もなく自分と年老いた従者だけで住んでいる。だから特に困ることもなく堀もそのままにしていた。

ただ毎朝その堀から馬が外にある草葉で食事をしているのが見えるのが気になっていた。黒地で白い斑の入った見事な馬で尻尾のところが火で焼切れたようになって赤くなっているのが目についた。「見事な馬なんだがな」

クシャルーンはその馬を見ながらいつも思うのだった。

「あの尻尾がな。妙な感じだ」

「全くでございます」

従者はいつもそう彼に応えた。大柄で逞しい主をいつも見上げていた。

「あれであの尻尾がなければ」

「だが。それでもいい馬だ」

クシャルーンは端整で光の強い目を持つ顔を捻って述べる。

「実にな」

「確かに」

「それでだ」

「ここで従者に言った。

「あの馬で都まで行こうと思う」

「都までですか」

「そうだ、大臣殿に御願いにな」

実は彼の家は貧しくともそれなりの家柄にあった。彼の祖父は大臣の親友でもあった。そのつてを頼って今の生活から抜け出ようというのだ。

「行きたいのだが」

「わかりました。それでだ」

「ただな、あの馬が誰かの持ち物であったならば」

それが問題であった。誇り高い彼は馬泥棒になるのは御免被りたかつたのだ。何としても。

「それが問題だな」

「では若し馬を尋ねてこられる方がいるようでしたら私が申し上げておきます」

「頼めるか？」

「はい」

従者は穏やかな笑みでクシャルーンに応えた。

「是非共」

「わかった。それではな」

こうしてクシャルーンは馬に鞍とあぶみをかけてすぐに都に向けて出発した。そうすれば馬の速いことはこの上なく普通の馬の倍の速さで進むのであった。

「何という速さだ」

クシャルーンはまずそれに驚いた。だが驚いたのはそれだけではなかった。

何とこの馬は何も食べないのだ。豆も草も何も食べない。

「どうしたのだ？たんと食べるがいい」

目の前に山のように草を積んでも見向きもしない。クシャルーンはそんな馬に対して首を傾げたが餌がいらぬのならそれでよかった。そうしてそのまま風の様な速さで都に行き大臣に会った。話自体は彼の思うように進み早速軍の士官に取り立てられることになった。

「しかしだ」

ここで大臣は不思議に思うことがあった。自宅でクシャルーンに對してそれを問うのであった。

「随分と早かつたな」

それであつた。手紙を出してすぐである。それが不思議でならなかつたのだ。

「どうしたのじゃ。こんなに早く」

「いい馬を手に入れました」

早速立派な士官の服に着たクシャルーンはそう大臣に答えた。

「それで」

「馬か」

「左様です」

「それでも速いのう」

大臣はクシャルーンの話聞いても首を傾げさせるのであつた。

「御主の家はここから随分とあるのに」

「とにかく速い馬でして。まるで風のようにでした」

「それでもじゃ」

話を聞いても納得しない。というよりはできなかった。

「また随分」

「何なら御覧になられますか？」

中々信じようとしなない大臣に対して述べた。

「宜しければ」

「うむ、是非見てみたい」

そう答えてクシャルーンと共にその馬を見た。大臣の目から見ても見事な馬だつた。身体つきも実によく体格も見事なものに見えた。それでも納得できないのだった。

「確かによい馬じゃが」

「では乗られてみますか？」

「また機会があればな」

「左様ですか」

「それだけ見事な馬なら御主が持っているがいい」

そのうえでこう述べた。

「よいな」

「わかりました。それでは」

「暫しの間わしの家におれ」

そうして彼に部屋を貸すことにした。

「私にですか」

「都に居を移すのじゃろう？」

これはもう決まったことであつた。軍の士官になりその勤務地は都に定まつていたのだ。もう故郷の従者には残つた僅かな家具を持つて都に上がるように伝えてある。後は彼が来て居を移すだけなのだ。

「それならばな。暫しの間」

「宜しいですね、それで」

「水臭いことはなしじゃ」

クシャルーンが遠慮を見せたのでこう返してきた。

「御主の祖父には何かと助けてもらつたしう。だから」

「かたじけのうございます。それでは」

「うむ、軍務を頑張れよ」

「はっ」

こうして彼は都に住むことになった。相変わらずその黒地に白斑の馬に乗つて都を回つていた。都の者は皆その馬を見て振り向くのであつた。

彼はそれを自慢にも思わず軍務を務めた。そしてある時同僚の馬が急に身体を悪くしたのを見た。

「風邪か？」

「どうも。そうらしい」

同僚は咳き込む馬を見て心配そうな顔を見せていた。

「大丈夫かな、これは」

「そうだな。少し休ませた方がいい」

クシャルーンも彼の馬を見た。見れば確かに咳き込んで辛そうである。とても無理はさせられない状態であつた。

## 第二章

「無理をさせれば大切な馬が」

「しかし弱った」

同僚はそれを聞いて困った顔になった。

「これから王宮に行かないといけないのに」

「火急の用か？」

「そうだ。それなのに馬なしでは。どうしたものか」

「それでは私の馬を使え」

クシャルーンは迷わずに述べてきた。

「私の馬は立派だ。だからこそ」

「あの馬をか」

同僚はその提案を受けて声をあげた。彼の馬のことは既に知っている。名馬という言葉では済まされない程だ。そんな馬を貸してもらえると聞いて声をあげずにはいられなかったのだ。

「本当にいいのか？それで」

「勿論だ」

武人らしい言葉であった。そこには何の迷いもない。

「だから。さあ」

「わかった。それではかたじけない」

同僚は深々と彼に礼をした。そうして馬を借りてすぐに王宮に向かった。

王宮での仕事は何の支障もなく終わった。時間も間に合った。だがその帰り道であった。

ある屋敷の前まで来たところで。馬の様子が急におかしくなったのだ。

「何だ？どうしたんだ？」

手綱を引いても言うことを聞かない。それどころか彼を乗せたまま屋敷にめがけて突っ込みだしたのだ。これは予想もつかないこと

であつた。

「あつ、こら！」

最早制止は不可能であつた。屋敷の門をくぐりそのまま屋敷の中を駆ける。彼は馬上にいて何も出来ないままであつた。そうしてある部屋の中まで来た。

豪華な部屋であつた。あちこちに家具や装飾品がありそのどれもが奇麗に磨かれているか宝石で創られていた。午はその中にある壁にかけられた絵に突つ込むのである。

絵には何も描かれていない。真つ白である。その真つ白な絵に馬は突つ込む。そうして。

絵の中に消えてしまった。それっきりであつた。後には部屋の中で呆然とへたり込む彼と慌てて部屋に入つて来たその屋敷の者達だけがいるのであつた。

この話はすぐにクシャルーンの耳に入った。というよりは同僚がほうほうのていで戻つて来て彼に話したのである。

「馬が絵にか」

「ああ、消えてしまった」

まだ呆然としながらクシャルーンに語る。

「完全にな」

「そうか。道理でな」

そう言われると納得するものがあつた。だがそれは彼だけで同僚はとても納得できないものがあつた。

「不思議に思わないのか？」

「何がだい？」

「いや、だからだ」

平気な顔のクシャルーンに対して言う。

「馬が絵の中に消えたんだ。こんな不思議なことが」

「いや、それよりも前からずっと不思議だつたから」

それが彼の言い分であつた。

「何も食べないし異常に速いし」

「うつむ。そうだったのか」

「それにしても。その馬が戻った屋敷だけれど」

彼はそこが何処なのかといった方に関心があった。

「何処なんだい？」

「ああ、そこは」

同僚はその言葉に頷く。そうして案内を申し出るのであった。

「では案内しよう。ついて来てくれ」

「わかった」

こうしてクシャルーンは同僚に案内されてその屋敷まで来た。それからすぐにその馬が入ったという絵の前まで案内されたのであった。その絵を見ると確かにそこにはあの馬がいた。

「この馬だったな」

「ああ、そうだ」

同僚の言葉に頷く。彼等と共に屋敷の者達もそこにいた。

「間違いない」

「実は何時の間にか絵から馬が消えていたんです」

屋敷の者の一人がクシャルーン達にそう説明した。

「そうだったのか」

「はい、それで不思議に思っていたのですがこうして戻って来まして」

「ふむ、成程」

クシャルーンはそれを聞いて納得したように頷く。

「そしてようやく戻る場所を見つけて戻って来たと。それはそうと  
して」

「はい？」

クシャルーンはここで屋敷の者達に問う。彼等もそれに応える。

「何でしょうか」

「この馬の尻尾だが」

その焼き切れた尻尾を指で指し示しながら問う。

「どうして。こうなったのだ」

「丁度そこに蠟燭を落としてしまいました」  
屋敷の者達はそう彼に説明する。

「そのせいでございます」

「そうだったのか。そのせいで」

「はい、左様です」

「わかった、ならいい」

彼はそれを聞いた後で懐から財布を取り出した。そうしてそれを屋敷の者達に手渡すのであった。

「あの、これは」

「謝礼だ、馬を借りていたな」

にこりと笑って述べた。

「おかげで何かと役に立った。礼を言う」

「礼と申されましても」

「私達は何も」

「だがこの馬は確かにこの屋敷の馬だ」  
クシャルーンはそう主張する。

### 第三章

「だからだ。取っておいてくれ」

「宜しいのですね」

「うむ」

主の言葉に頷く。二言はなかった。

「それで頼む」

「わかりました。それではそのように」

「そういうことだな」

こうして話は収まった。だがここで問題が起こった。

「馬を返したのはいいが」

同僚は帰り道で早速そのことを彼に言ってきた。

「何だ？」

「御主はこれからどうするのだ？」

彼を心配して言ってきた。

「馬をなくして。それで」

「そうだったな」

言われて思い出す。だがもうどうにもならない。

「暫くは馬なしか」

「何なら拙者の馬を貸すが」

「いや、それには及ばぬ」

だが彼はそれを断るのだった。

「よいのか」

「また馬は手に入るしな。だからだ」

「そうか。御主がそう言うのならよいがな」

あまり押し強い性格ではない。同僚はクシャルーンがそう言うのならと己の意見を引っ込めたのであった。

「だが。当分は歩きぞ」

「それはそれでよい」

あくまでさばさばした彼であった。

「それも鍛錬のうちだ」

「そうか」

そんな話をしていた。すると後ろから馬のいななきが聴こえてきた。

「んっ!？」

「馬か!？」

二人がそのいななきに振り返ってみると。あの馬がいた。

「待て」

同僚はその馬を見て思わず声をあげた。

「また出て来たのか」

馬は口では答えられない。だがそのかわりにまたいななきのであった。

「どうしてだ」

「ああ、やっぱりここにいたか」

「また出たと思えば」

後ろからあの屋敷の者達が来る。ようやくといった感じで馬に追いついてそれからまた言うのであった。皆それぞれ肩で息をしている。慌てていたのがわかる。

「これは一体どういうことだ?」

「あのですね」

主がクシャルーンに答えた。

「絵の中に収まったのはいいですが」

「またすぐに出て行ったのでございます」

「あの絵の中か」

クシャルーンは話を聞きながら述べた。

「またしても」

「左様です」

「どういうわけか」

「御主、一体どういふつもりだ」

クシャルーンは馬を見上げて問うた。だがやはり馬は口では答えはしない。いなくだけである。だがそれと同時に彼をじっと見ていた。

主はその目に気付いた。それで言うのであった。

「いや、これは」

「どうしたのだ？」

「成程、わかりましたぞ」

顔を晴れやかにさせてクシャルーンに述べる。

「この馬は貴方様をお慕い申しているのです」

「私をか」

「はい。かなり可愛がっておられたのですね」

「別にそんなつもりはなかったが」

朴念仁な彼には元からそんなつもりはなかった。武人として普通に馬の手入れをしているつもりだった。だがその真面目さが馬の気に入ったようなのだ。

「ですがこうしてわざわざ絵から出てですし」

主はまた言う。

「これはやはり」

「だがそうだとするとだ」

クシャルーンは言う。

「どうすればいいのだ」

「この馬をお受けして頂けないでしょうか」

主はこう彼に述べてきた。

「貴方様をお慕いしておりますし」

「よいのか？」

「はい」

主は快くこう述べてきた。

「馬はその相応しい主のところにあるべきです。ですから」

「そうだな」

同僚も主の言葉に賛同するのだった。

「この主の言う通りだ。やはり」

「ですから是非」

主はまた彼に勧めてきた。

「お受け取り下さい」

「わかった」

そしてクシャルーンはそれを受けることにした。ここでもまた頼まれればそれが道理に合わない場合でない限り受ける彼の性格が出たのだった。

「では受けよう。それでいいな」

「はい、どうぞ」

「よしっ」

それを受けて馬の頬に手をやった。

「それでよいのだな」

やはり馬は答えない。そのかわりまたいなないた。

「いいようだな」

「変わった馬だ」

クシャルーンは同僚の言葉を聞きながら馬に対して言った。

「絵の中から出て来たただけでなく私について来るとはな」

そうは言っても嬉しそうなクシャルーンであった。それから彼はずっとこの馬と共にあった。そうして武勲を重ね続けやがては將軍になったという。

この馬はずっとクシャルーンと共にいたという。だが彼が大往生を遂げた後は程なく絵の中に戻った。そしてペルシアがイスラムに滅ぼされると絵は彼等によって何処かに売り飛ばされたという。今その絵が何処にあるのかは誰も知らない。噂によれば戦乱の中で焼かれたとも何処ぞの貴族か美術館が持っているとも言われている。だが真相はわからない。少なくともこの馬がまた絵から出たという話は伝わってはいない。

絵の馬

絵の馬

完

2  
0  
0  
7  
・  
1  
0  
・  
1

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1581d/>

---

絵の馬

2009年3月24日09時22分発行